和歌

教材のねらい

1 選定の理由

現存する最古の歌集である「万葉集」、最初の勅撰和歌集である「古今和歌集」、古典和歌の集大成とも言える「新古今和歌集」といった三大歌集に加えて「後拾遺和歌集」の代表的な和歌を読み解き、鑑賞することを通して、古典文法はもとより和歌の修辞や和歌史の流れをつかみ取れるように採録・配置した。最終的には各生徒独自の「読み」（解釈・鑑賞）を引き出すことを目指したい。数多の表現形式において、なぜ和歌という形態が日本人に長く愛されてきたのか、和歌とは何か、という命題にまで到達できるとより望ましい。

和歌は、古人の心が凝縮されたもので、しかも一首で一つの自立した文章となっている。一つの和歌ごとに、修辞や文法などのポイントを示しやすく、生徒の意欲を集中させやすい教材である。三十一文字の中に、古人が紡ぎだした心情や情景がいかに込められているか一首ずつ丁寧に味読し、それぞれの和歌の独自性と和歌全体の共通点、といった比較する視点をもって単元のまとめに臨みたい。

日本的な心が凝縮されている和歌を通じて日本に対する認識を深め、古人から受け継いできたものを尊重する態度を育てたい。

2 指導のねらい

音読を中心として和歌の調べの柔らかな美しさを味わわせ、「万葉集」の上代の素直な詩情、「古今和歌集」の王朝和歌の優美さ、「後拾遺和歌集」の抒情性、「新古今和歌集」の中世和歌の無常観に彩られた繊細さを読み取らせ、そこに貫流する日本的な精神を意識させる。教師による（当時の披講を想起させるような）範読、あるいは聴覚教材などを適宜用いて古典和歌の音読とその意義を併せて学ばせる。

古典文法（助動詞・助詞・係り結びなどの用法）・重要古語を再度確認させ、知識の定着を図らせる。その際、無味乾燥な知識の伝達に終始せぬよう、古語のおもしろさ（語源・原義・同根の語・現代語との関係など）に触れさせ、言語感覚を磨く機縁とする。

和歌を読むうえでの基礎知識（長歌と反歌の関係・本歌取りなど）や和歌独特の修辞（枕詞・序詞・掛詞・縁語・見立てなど）、その効果を学ばせる。

現代語訳をさせる際、詠歌状況や修辞に留意しながら、詠まれた情景、作者の心情にまで踏み込んで訳出できるように指導する。その際、生徒の自由な感性を引き出せるよう、さまざまな「読

み」の可能性があることを紹介し、和歌を「読む」ことのおもしろさを感じさせたい。

作品を適宜選択させ、書写し、自分なりの訳出を付させる。現代語訳をすることによって、作者の言葉を自分の言葉で言い換える表現力や抽象語の中身を考える力を養う。言葉への意識を高め、古人の言葉を追体験するという精神を培う。

歌の心性はその詠まれた時代の空気と不可分のものである。導入時、あるいは随時、歴史的な説明を混ぜ、「時代と歌」など広がりのある授業展開が望ましい。現代歌人の歌の紹介や、生徒自身に歌を詠ませる指導法も有効であろう。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕（1）ア

(2) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕（1）ウ

(3) 本歌取りや見立てなどの表現の技法とその効果について理解している。〔知・技〕（1）オ

(4) 古典の世界に親しむために、作品の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。〔知・技〕（2）イ

(5) 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、確認する。〔知・技〕（2）ウ

(6)「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B（1）ア

(7)「読むこと」において、作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B（1）イ

(8)「読むこと」において、文章の構成、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B（1）ウ

(9)「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B（1）エ

(10) 進んで和歌の代表的作品を読み味わい、各歌の季節とテーマを考え、学習課題に沿って、和歌の特徴的な表現技法について理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕